



2013.7.1

7月 ちとせだより

神戸YMCAちとせ幼稚園

園外保育に出かける公園や野原といった身近な自然の中で、子どもたちはアリやダンゴムシが動き回る姿から、こんな小さな昆虫も生きていることを、知識ではなく五感を通して実感します。そして、成長に合わせてその姿を変えていく、テントウムシやアオムシなども、子どもにとっては、たまらなく不思議なものとして、子どもたちの想像力をかきたてて、将来にわたる探究心への原動力となっていきます。また、どんな精巧なおもちゃやTVゲームよりも、身の回りにあるほんの小さな自然は子どもたちを飽きさせることなく、子どもたちに大切な生命の営みを伝えます。しかし、どんどん自然の中で生命と関わる経験が少なくなっている現代では、生命そのものに対する認識が出来ないままに大人になっていっても不思議ではないのかも知れません。

子どもたちにとっては、自由な時間がたっぷりと確保された、この時にしか経験できない夏休みがもうすぐやってきます。夏の海岸や潮溜まり、野原や小川といった環境は、いつまでも子どもを飽きさせない環境として子どもたちを包み込みます。そんな自然に抱かれた子どもたちは、なぜかとても落ち着いて、電子機器に囲まれている時の気ぜわしさやイライラはなく、落ち着いた素直な気持ちに溢れているように感じられます。そこでは乱暴な言葉も行動もなく、まるで一人ひとりが無言で自然と対話をしているかのようです。これはなぜなのかと思うのですが、私たち人間は、自然に包まれることで、その本来の生きる姿と気持ちを思い出し、偉大な自然の一員として、まさしく生かされている、養われていることを素直に受け入れているからではないでしょうか。

人間は自然を守ることは出来ても、生命を創ることは出来ません。創造主である神を実感するのもまた自然の中なのです。あまりにも生命が軽んじられ、また錯覚されている時代であるからこそ、自然から教えられる大切な価値観をきちんと受け止めることが出来る体験が、子どもの時期には必要です。

自然の中で遊ぶ子どもの姿は、「野に放たれた子どもたち」という表現が一番相応しく感じられるほどに生き生きとしています。そして、子どもを育てる大きな力を持っている自然の素晴らしさを、私たち大人は忘れることなく子どもたちの成長を見守りたいと思います。

「自然を見よ。そして自然が教える道をたどっていけ。自然は絶えず子供を鍛える。」

ジャン＝ジャック・ルソー (1712-1778) 「エミール」より